文化と認知研究の新展開：
東アジア文化圏の包括的認知傾向と北米文化圏の分析的認知傾向

アルバータ大学心理学部

増田貴彦

人間の「こころ」の内的な働きのみ焦点を当て，こころの普遍性の探究を自らの研究の最重要課題とする研究者は多い。しかし，あらゆる社会・文化的影響を取りさった真空状態の「こころ」を想定しながら研究することは，はたして人間の理解にどれだけ貢献できるのだろうか？また「こころ」への社会・文化的影響をノイズとして排し過度に抽象化した人間の行動の議論をすることは，２１世紀を迎えて噴出しつつある文化・エスニシティ・民族の問題を解くための鍵となるのだろうか？そして，こうした抽象的な「こころのモデル」を超克する新たな見方はないだろうか？

こうした問題意識から，過去３０年，文化心理学—心理学・人類学・言語学・哲学・神経科学など多くの分野からなる学際的研究分野—は，洋の東西の人々のこころの働きの差異を見出し，それを説明すべく多くのモデルを提案しながら実証研究を積み重ねてきた。文化心理学にとって最も重要な理論的仮説は，人間のこころは，そのこころをとりまく社会・文化的環境との相互作用の過程で成熟していくものであるということである。そのため，文化心理学では，人間のこころと社会・文化は切っても切れない関係を十二分に認識し，その相互構築関係をあぶり出すことを研究の主眼においている。

本章では，まず文化心理学が生まれてきた背景を概観し，文化と認知研究の新展開に関わる，３つの具体的な研究テーマ（「文化と注意」「文化と表情認知」「文化生産物（カルチュラル・プロダクツ）」について筆者の行った研究を中心に議論する。そして最後に，文化と認知研究に関わる２つの分野—発達科学と神経科学—との学際的研究の可能性を論じながら，この新しい人間科学の次なる展開について考察する。

本章で紹介する筆者らの一連の研究は，現在行われている様々な文化心理学研究の一例にすぎず，読者の方々には，これをもって文化心理学研究のすべてと考えてもらうつもりは毛頭ない。しかし，少ない紙面で多くの研究を短くレビューするよりは，具体的なテーマに絞った一連の研究を紹介し，これらの研究がどのような問題意識に基づいて行われ，その問題はどこまで解明されているのかについての最新情報を共有するほうが，文化と認知研究の新展開を語る上で望ましいと感じた。文化心理学についての体系的なレビューについては他の文献を参考にしていただければと思う（Heine, 2008; 増田・山岸 2010）。

第１節：文化心理学の学問的背景

本章で紹介する文化心理学は，人間の社会行動を研究する社会心理学の流れの中から生まれてきた。しかし，その学問的背景をみれば，古くは実験心理学の祖と言われるヴント（Wundt, 1916）が，人間の社会・文化的行動についての研究領域として提唱した「民族心理学」にその起源を辿ることもできるし，近年では，心理学および人類学からそれぞれ提唱された理論的枠組みの影響も大きい。たとえば，心理学においては，「認知革命」の一番の担い手として活躍してきた発達心理学者ブルーナー(Bruner, 1990)が，著書「アクツ・オブ・ミーニング」のなかで，認知革命後の心理学研究が，こころを取り巻く社会・文化的要因を軽視してきたと批判している。そして，社会・文化的要因を積極的に考慮に入れ，「人間は自ら意味を紡ぎだすことで社会的現実を創り出し，そこで主体的に行為する存在である」という想定の下に，まったく新しい人間研究の学問分野を作り出す必要性を説いている。

同様の議論は，人類学においても見られる。解釈人類学の担い手であったギアツ（Geertz, 1973）は，著書「文化の解釈学」の中で，文化的文脈から切り離された抽象的な人間を考えることは人間を理解する上で，まったく意味がないと論じている。ギアツによれば，ある文化に生まれ落ちた人は，その段階ではまだ未完成であり，「その文化の網の目から紡ぎだされた資源を使いながら，経験を重ねることで初めて完成する存在」であるという。そして解釈人類学の役割は，そうした文化と人間の関わりの表面だけに触れるような薄い記述ではなく，意味の網の目の一つ一つの襞を丁寧にめくり，そこに現れる微細なこころの働きを描きつくすような厚い記述をすることであると主張する。

こうした人々の紡ぎだす意味の体系を「文化」として定義し，文化とこころを研究する学問として文化心理学を定義づけたのが，人類学者のシュウェーダー（Shweder,　1991）である。シュウェーダーは，人々のこころが文化を作りだす（「文化←こころ」）過程，そして，その文化に生きることで人々のこころが作られる過程（「文化→こころ)」の双方向的な相互構築過程（「文化⇔こころ」）を描き出すことが文化心理学の役割であると論じた（図１参照)。

人間が，文化という意味の網の目の中で生きているという事実を，理解することは一見容易そうであるが，当該の文化を外から見つめる目がなければ難し

い。それは，あたかも水中の魚にとって，水はあたりまえに存在するものなので，いざ，水中を出てみないとその重要性がわからないようなものである（Kluckhohn, 1944）。我々が普段疑うこともなく，当たり前のこととしている常識が何を前提として成り立っているかについて明らかにしようとする試みは，社会学においても，ガーフィンケル（Garfinkel, 1985）の「常識違反実験」に代表されるようなエスノメソドロジーとよばれる分野が担ってきた。また，社会心理学においても，人々が現実を客観的に理解することは極めてまれであり，曖昧な現実を理解するために，各人が他者とのコミュニケーションを通しながら社会的現実を生み出していく過程を実験的に示した，シェリフ（Sherif, 1936）のオートキネティック効果の研究などは，同様の問題意識に基づいて行われた研究といえよう。

このように，文化心理学が世に生まれ出た背景には様々な学問分野が関わっているのであるが，社会心理学をベースとした文化心理学研究が本格的に活発になる契機となったのは，自己のあり方について２つのモデルを提唱した，マーカスと北山の研究である（Markus & Kitayama, 1991; 2010; Kitayama & Cohen, 2007）。この研究は，理論面で解釈学的な要素をもつ文化心理学に，実験・調査を用いた実証研究の方法論が積極的に受け入れられたという点で，またそのことで多くの研究分野との対話を可能にしたという点で，この研究領域が発展していった過程の重要なマイルストーンとなっている。以来，文化心理学では，異なる人間観・世界観がそれぞれの文化に生きる人々のこころの成り立ちに及ぼす影響について，様々な作業仮説が提唱されている。次節では，その中でも実証研究が進んでいる，ニズベットらの議論を紹介する。

第２節：「分析的認知傾向」と「包括的認知傾向」

近年，文化心理学では，日本・韓国・中国などの東アジアの文化圏と，アメリカ・カナダ・オーストラリア・ニュージーランド，そして西欧の国々を一まとめにした欧米文化圏を大まかに二分した時に，それぞれの文化圏において特徴的な認知傾向を見出せるのではないかという予想の下に研究が進められている。

たとえば，ニズベットらの研究グループ（Nisbett, 2003; Nisbett, et al. 2001）は，心理過程にあらわれる洋の東西の差を理解する上で，それぞれの文

明が育んできた世界を認識するための認識法の違いに着目し，そうした認識法の違いのせいで，異なる文化圏に生れ落ちた人々は，同じ現象を前にしても異なる理解をすることになるという理論を提唱している。

ニズベットらによれば，アリストテレス以来，欧米文化圏では「分析的に世界を理解する方法（分析的認知傾向）」が育まれてきたという。この認知傾向の特徴は，世の中の様々な事象の本質を理解するためには，物事を分析的に切り分け，切り分けられたそれぞれの要素がどのような作用を持っているのかを見極めるというものである。こうした考え方を持っていれば，ある事象を取り巻く状況要因のような瑣末的なことにとらわれてることは明晰な思考の妨げになると受けとめられる。

これに対して東アジア文化圏では，儒教，仏教，老荘思想，そして東アジア的なアニミズムの影響を受けて，歴史的に「包括的に世界を理解する方法（包括的認知傾向）」が育まれてきたという。この認知傾向の特徴は，世の中とは人間が把握しきれないほどの複雑なシステムであり，そのようなシステムの中で，少しでも物事の本質を理解するためには，関連した様々な要因が複雑にからまりあっている有様，つまり物事の全体像を把握する必要があるというものである。だから，こうした世界観が主流の文化に生きる人々にとっては，物事の一部だけを簡単に切り分けて全体を見ることができないことを「木を見て森を見ず」といって，十分な思慮を働かせた思考とは思わない。

ニズベットらの研究グループは，こうした想定のもと，従来の社会心理学および認知心理学で人間に普遍的に備わっていると考えられてきた原因帰属や態度推論といった高次の認知過程のみならず，記憶・カテゴリー化・注意といったより基本的な認知過程において体系的な文化差が見いだされる可能性を検証している（Choi & Nisbett, 1998; Choi, et al. 1999; Ji, et al. 2000 ; Ji, et al. 2001; Morris & Peng, 1994; Norenzayan, et al. 2002; Norenzayan, et al. 2007; Nisbett & Masuda, 2003; Nisbett, & Miyamoto, 2005; Peng & Nisbett, 1999; Norenzayan, et al. 2002)。筆者もこの研究グループとともに過去１０年，様々な実証研究を行ってきた。次節からは，そうした研究がどのような問題意識を持って行われ，これまでどのような結果が得られたのかを紹介する。

第３節：文化と注意

いうまでもなく，私たちは人種，エスニシティ，性別を問わず等しく人間である。だから，私たちが何かを見る際の注意の向け方にも，個人差を超えた「人間」としての普遍的な部分があるのは確かである。しかしながら人々がある現象に注意を向けるという極めて基本的な心理過程にも文化差があることを示す多くの証拠がある。そして，こうした注意の向け方の文化特殊性を理解することは，人々がどのような意味体系の世界に生きているのかを理解するためにきわめて重要である。

このように考え，筆者はニズベット（Masuda & Nisbett, 2001)とともに，日本人とアメリカ人に，水中の風景が描写された短いアニメーション・ビデオを呈示し，ビデオを見終わった後，それがどんな画面であったか自由に話すように求めるという研究を行った。このビデオでは，色鮮やかな魚の群れが動いている姿をはじめ，水中生物，水草，岩場，珊瑚礁などが映し出され，どんな画面であったか自由に話す際には特に正解は想定されていなかった。こうした簡単な課題であったにもかかわらず，結果を見ると画面の何を言及するかについては，文化によって大きな違いがあることがわかった。具体的には，アメリカ人は，まず画面上で一番目立っている魚について，「３匹の魚が右から左に泳いでいます」と話し始めることが多かったのに対して，日本人のデータは，「水の色は緑で，池のような中を魚が泳いでいます」といったように，まず魚が生息している環境やどのような場面であるかの状況を述べることで出来事のフレーム作りをした後に，その中を動いている魚について述べるという傾向が見られた。こうした結果を，「分析的認知傾向」および「包括的認知傾向」という枠組みから考えてみれば，アメリカ人は，「様々な情報が映し出されている風景の中で，中心的な事象は何かを見極めて，そうした重要と思われる事象に注意をを向けることを心がけ，重要とは思われない背景や状況は無視する」という「分析的注意」とも言える見方をしていたと考えられる。そのため，実際にアニメーションを見る場合では，細かい周辺の情報に言及するのではなく，画像の中で最も目立った魚についてコメントをしがちであったと理解することができる。一方，日本人は，「様々な情報を全体的・包括的に捉えて，中心的な事象ばかりでなく，その事象の背後にある背景，その出来事を取り囲む状況，そして，それぞれの事物の関係にまで注意を向ける」という「包括的な注

意」とも言える見方をしていたと考えられる。そのためアニメーションを見る時にも，たとえ大きな魚が目立っているのはわかっていたとしても，まずは全体的な風景に言及することが当たり前という判断をしたと理解することができる（同様の結果は，増田とニズベット（Masuda & Nisbett, 2006）の間違い探し課題でも見出されている）。

増田ら（Masuda & Nisbett, 2001）は，さらに，日本人やアメリカ人の注意のパターンが，記憶にまで影響を及ぼすことを確かめるため，動物画像の再認記憶実験を行っている。この研究では，まず第１段階として，日本人とアメリカ人に一連の動物の静止画像を呈示し，その動物がどれだけ好ましいかを評定してもらった。そしてその後，第２段階として，第１段階で好ましさの評定を行った動物の再認課題を行った。この再認課題では，第１段階で使われた動物と，新たに追加された動物とを参加者に呈示し，その動物を評定時に見たかどうかを答えてもらったのだが，課題の難しさを操作するために，すでに第１課題で見たことがある動物でも，ある刺激では元の背景（第１段階でに用いられたオリジナルの背景）が組合わされて比較的簡単な課題になっていたのに対して，別の刺激では，まったく新しい背景が組合わされていた（図２参照）。筆者らの目的は，この再認課題の成績に文化差が見られるかどうかを調べるということだった。

もちろん画面上の特定の対象（動物）を背景とは独立して記憶している人にとっては，背景が同じか変わったかは，再認の成績にさほど影響を与えないはずである。これに対して，特定の対象を背景と組合わせて記憶している人にとっては，前に見た動物に新しい背景が組合わされてしまうと，同じ動物だと判断することに迷いが生じるため，再認の成績が落ちると予想できる。結果を見ると，背景が変わると再認の成績が落ちるという点では日本人もアメリカ人も同じであったが，その程度には統計的に有意な差が見られた。具体的には，アメリカ人の成績の落ち込み率と比べて，日本人の成績のほうがはるかに大きいことがわかった（図３参照）。

それでは，包括的な注意傾向を身につけた東アジア文化圏の人たちは，すでに課題の第１段階において，動物のみならず背景に目を向けるような傾向があるのであろうか？チュアたち（Chua, et al. 2005）は，先に紹介した増田とニ

ズベットの実験（Masuda & Nisbett, 2001)を，中国人とアメリカ人を対象にして追試し，同時に実験参加者の視線の測定を行った。その結果，中国人も日本人同様，背景が異なると再認の成績が大きく低下することが再確認されると同時に，眼球運動の測定結果を見ると，すでに第一段階から，中国人はアメリカ人よりも背景情報に視線を向けがちであるということを報告している。こうした結果は，物理的にはまったく同じ画像を見た場合であっても，あらかじめ身につけた文化特有の構えによって，その画像の捉え方には明らかな文化差が生じることを示していると言えよう。

では，こうした東アジア文化圏の人々が周辺にまで注意をむけ，画面を包括的に捉えるという傾向，欧米文化圏の人々が画像の中で中心的かつ目立った情報に目を向けるという傾向は，線や点といった抽象図形においても同じように見出せるのだろうか？たとえば「包括的認知傾向」を身につけた人は，抽象的な画像の一点だけを見つめていなければならない課題でも，ついつい周辺の情報にまで目を向けてしまう傾向があるのだろうか？このことを明らかにするために筆者ら（増田, et al. 2008）は，日本に滞在している欧米人と日本人を対象に，コンピュータのモニター上に提示された点滅する円を 30 秒間注視するように求めた。そしてその際に，一つの条件ではモニター上に円が一つだけ呈示されていたが，もう一つの条件では，中心の円を囲む 4 つの円が点滅する画像が呈示されるようにプログラムを組んだ。ここで筆者らが調べようとしたのは，二つ目の条件で真ん中の円だけを見るように求められている時に，参加者がどれくらい周囲の円に目を向けてしまう傾向があるかということである。そこで眼球運動測定器を用いて，注視点が中央から逸脱する度合いを測定した結果，日本人は，まわりに円が点滅している場合はそうでない場合に比べて注視点の数や分散が大きくなる傾向を示しているのに対して，西洋人の参加者は，まわりに円の有無にかかわらず，注視点の数や分散に大きな変化が見られないことが確認された。つまり日本人の参加者は，真ん中の円だけに注目するように求められても，周囲で点滅している円に課題の遂行が妨害されてしまうのに対し，西洋人の参加者は実験者から求められた通り，背景情報を無視することができていたわけである。この結果は，同じように抽象的な刺激を用いて注意の文化差を検討した北山ら（Kitayama, et al. 2003）やジーら（Ji, et al. 2000）

の結果と一貫しており，東アジア文化圏の人々の方が欧米文化圏の人々よりも背景情報に敏感であるという仮説を支持している。

さて，こうした一連の研究からわかったことは，心理学において普遍的と思われてきた知覚・注意・記憶などの基本的心理過程にも明らかな文化差があることである。このような知見は，1950 年代にブルーナー（Bruner, 1957; Bruner & Goodman, 1947）によって提唱されたニュールック心理学の理論―人間の知覚は，決して客観的ではなく，知識・構え・気分・動機・価値観の影響を強く受けているという理論―を，それぞれの文化圏で歴史的に育まれてきた認知傾向に当てはめ，文化とこころの問題にまで広げた議論といえよう。しかしながら，今までの研究は注意の向け方に文化差があることを報告するのみにとどまり，どのような時に文化に特有の認知傾向が強まり，どのような時ならば文化に共通の注意のパターンが見いだされるのかについての詳細が議論はまだ少ない。この点について，先崎ら（Senzaki, et al. 2012）は，先に紹介した増田ら（Masuda & Nisbett, 2001）の水中のアニメーション画像の魚の動きをさらに活発にしたビデオを用い，ヨーロッパ系カナダ人，東アジア系カナダ人，そして日本人の眼球運動のパターンを測定したところ，何も教示をせずに画像を見てもらった場合は，すべてのグループで同じように活発に動く魚が主要な注視の対象になっていたのに対し，どんなビデオであったか説明するという教示の場合は，背景情報への注視時間が増加する傾向にあるため，中心の魚への注視時間は減少し，その増減の大きさは，日本人で一番大きく，ついで東アジア系カナダ人，そしてヨーロッパ系カナダ人の順であったことを報告している。こうした結果は，コミュニケーションあるいは語り（ナラティブ）が文化に特有の認知傾向を活性化させるのに重要な役割を果たしていることを示唆しており，先に述べたブルーナー（Bruner, 1990）の議論とも通じるところがある。以上の結果から，筆者は，今後の文化と注意研究では，人間のコミュニケーション過程にも着目し，同一文化圏に属する構成員の一対一の対話，あるいはグループでの対話が注意のパターンにどのような影響を及ぼすのかについての詳細な研究が必要であると考える。

第 4 節：文化と表情認知

ダーウィンの「人および動物の表情について」（Darwin, 1872/1965）におい

て，人の顔にあらわれる表情が，感情表現において重要な役割を果たす可能性について論じられて以来，表情と感情の研究は，心理学の主要な研究領域である（Ekman, et al. 1972）。1970 年代に入ると，基本的感情とそれに対応する感情には生物学的な基盤があるという想定のもと（Tomkins, 1962; 1963），多くの文化比較研究が行われ，表情の表出と表情の読み取りには文化普遍的な傾向があることが報告されてきた（Ekman, 1971; Ekman & Friesen,　1971; Izard, 1971; 1994）。

しかし，私たちの日々の生活の中で，ある人の感情を理解する際には，その人の表情のみならず，場の雰囲気を読むことも重要である。たとえば，友人が笑顔を見せていても，周りの人たちが困ったような顔をしていたら，その友人は「作り笑い」で場の気まずさを取り繕っていると考えることもできる。逆に，周りの人たちも同様に笑顔であるならば，まったく同じ笑顔から，その友人は非常にうれしい気持ちになっていると判断することもできるだろう。

こうした表情の判断に際しての状況要因の効果については，北米においても議論がおこなわれている（Carroll & Russell, 1996; Fazio, 2001 ; Russell, 1991; Russell & Fehr, 1987）。たとえば，キャロルとラッセル（Carroll & Russell, 1996）は，ターゲットの人物の表情（例　怒り）と，その表情とは対応していない状況（例　ハイキングの途中で熊に遭遇した）という情報を同時に呈示したところ，参加者は，ターゲット人物の表情よりも，状況要因を考慮して，その人物が感じている感情は恐怖であると判断する傾向があったことを報告している。しかし，こうした研究報告は表情研究全体の中では，極めて限定的であり，いまでもほとんどの表情研究において，状況要因のみならず，背景や髪型までもノイズとして除去した顔表情のみが，科学的研究を行う上で望ましい刺激として用いられるのが常である。

筆者らは，北米を中心に行われている表情研究において，私たちの日常生活における表情判断からするといささか不自然な刺激が用いられる背景には，状況要因を排した理想的な「表情」を想定した研究者自身の「分析的態度」が反映されていると同時に，研究に参加する北米の人々に共有された「分析的認知傾向」のために，たとえ状況要因を考慮に入れた研究を行っても，北米を中心として蓄積されたデータに現れる状況要因の効果が限定的であるが故，その成

果が十分認識されていないということにあると考えた。実際，北米の参加者が人の表情と感情の対応関係が極めて高いという社会的現実の中に生きているのであれば，その人の真の気持ちをまわりの雰囲気とか，状況とかはあまり考慮にいれずに，ある人が笑顔ならば，それはその人がハッピーであるということ，その人が悲しそうな表情ならば，それはその人が悲しいということとであると判断するのは至極妥当なことである。

筆者ら(Masuda et al. 2008a)は，こうした問題意識から，アメリカ人と日本人を対象として，コンピュータ画面上に５人の人物を呈示し，その画面の中心にある人物の表情からその人物が感じていると思う感情の強さを実験参加者に判断してもらうという課題を作成した。筆者らの目的は，ターゲットの人物を除く他の４人の表情（背景情報）がターゲットの人物の表情の判断にどのように影響するかを調べることにあった。そこで，参加者には，中心にいるターゲットの人物の表情からその人物の感情（怒り，悲しみ，喜び）とその度合いを評定してもらい，ターゲットの人物と背景の人物の表情が一貫している画像の判断（全員が笑顔）と登場人物の表情が一貫していなかった場合（ターゲットは同じ笑顔だが，周辺の人物は怒りの表情を見せている）にどれくらいずれが生じるかを測定した。

もしも参加者がこの課題をターゲットの人物のみを注視し，その表情からのみ感情を判断するのであれば，まわりの人たちの表情は中心人物の感情の判断とは無縁であるはずである。そのため背景の人物がいかなる表情をみせていたとしても，ターゲット人物の同じ表情は，同じように評定されるだろう。しかしこの実験に参加した日本人は，中央の人物の感情を判断するにあたり，背景の人物の表情に左右される傾向が強かった。例えば，ターゲットの人物が笑顔でまわりの人たちも同様に笑顔であった場合に比べると，中央の人物の笑顔が同じでも，まわりの人たちが悲しみの表情を見せている場合には，ターゲットの人物が喜んでいる程度を低く見積もった。一方，背景の人物の影響は，アメリカ人のデータでは全く見られなかった。

さらにこの実験では，チュアらの研究(Chua et al. 2005)を踏襲し，参加者が課題に従事している間の眼球運動を測定したところ，日本人の場合，周辺への注視が平均して１５％，中心人物への注視が８５％程度であったのに対し，ア

メリカ人では中心人物への注視が９５％を超え，周辺人物への注視はほとんどないこと，そして，最初の１秒間は，日本人もアメリカ人も同様にターゲット人物に注意を向けているが，１秒後には，日本人の注視点は，アメリカ人のそれに比べ，背景へと向けられる傾向が強いことがわかった。

この結果は，表情認知の際に背景情報がどれくらい考慮されるかについて文化差があることを示したはじめての報告といえる。しかしながら，（１）課題を簡単にするためにアニメーションを用いたこと，（２）ターゲット人物が誰かをはっきりさせるために背景人物より一回り大きくしたこと，（３）画像を判断する時間は統制しなかったことが理由となって，もしかしたら，本来背景の人物に表情にも関心を示せるはずであったアメリカ人にとって，その重要性が十分認識されにくかったという可能性がある。そこで，（１）ターゲットの人物性別・エスニシティにも多様性を持たせた実写画像を用い，（２）ターゲットと背景の人物の大きさを同一のものにし，（３）１０秒間は強制的に画像を見なければならないデザインにして，ヨーロッパ系カナダ人，東アジア系カナダ人，東アジア文化圏からの留学生，そして日本で育った日本人を対象にした研究を行った（図４参照）。もしこのような条件においても、先の結果が追試できるのであれば、表情認知の際に背景要因をどれくらい考慮にいれるかについての文化差は確かにあることの証明になりうる。また、文化的背景に基づいて参加者を４グループにしたのは，果たして背景情報を重視する度合いが，複数の文化圏の意味体系に晒されることにより，変化しうるのかどうかを調べるためであった。こうしたデザインで行われた実験から，まず，実写画像を用いた場合でもアニメーション画像を用いたときと同様の結果が出ていることがわかった（同様の結果は，増田ら（増田, 2010; Masuda, et al. 2012a）が中心人物を会社の上司，背景人物を会社の部下という設定で行った研究においても追試されている)。次に，背景情報に影響を及ぼされる度合いは，日本人が一番大きく，続いて東アジア系留学生，東アジア系カナダ人，そして最後にヨーロッパ系カナダ人という順であることが確認された（図５参照)。さらにこうした傾向は，眼球測定器を用いて分析した注視点の配分と相関していることもわかった（Masuda, et al. 2012)。

以上の結果から，ヨーロッパ系カナダ人は，アメリカ人同様，感情を判断す

るとなると，判断の対象となる人の顔だけを見る傾向が強いのに，日本人はその背景にいる人たちの顔の表情にまで注意を向けていることが，再確認できたといえる。そして，ヨーロッパ系カナダ人がターゲット人物を注視する傾向は，強制的に背景情報への注意が高められた課題においても，強固に維持されていたということも確認できた。このような傾向は，根本的帰属錯誤（Ross, 1977）あるいは対応バイアス（Jones, 1979）と呼ばれる認知傾向—たとえ状況要因がはっきりしていてもそれを無視する傾向—が，東アジア文化圏の人々にくらべ北米文化圏の人々に強く見られるという知見と対応している（Choi, et al. 1999; Masuda & Kitayama, 2004; Miyamoto & Kitayama, 2003)。さらにこの結果から，同じカナダという国にあっても，東アジア系とヨーロッパ系というエスニシティの違いによって，判断の仕方には若干の違いがあり，東アジア系カナダ人の注意のパターンはヨーロッパ系カナダ人にくらべて，背景情報への関心が高まっていたこと，また日本人の留学生の場合は，カナダにいることで，若干その傾向は弱まるものの，基本的には日本で暮らす日本人の判断の傾向と変わりはなかったことなどもわかった。このように、同じエスニシティの人々であってもどのような環境に身を置いているかで結果が異なったという事実から，注意のパターンは生得的なものというよりは，自らの置かれた文化的意味体系の中で学習されていくものであると理解することが妥当であるといえよう。

こうした一連の研究は，表情認知研究に新たな展開を促す上で少なくとも2つの意義がある。まず，ブルーナーやギアツの言葉を借りれば，私たちが日常生活で行っている表情認知という行為は決して真空状態で行われるわけではなく，それぞれの文化に根ざした具体的な文脈の中で行われる事実を認識できたことである。そうであるならば，心理学者，特に社会心理学者は，こうした社会・文化的な環境の中で行われる表情認知がいかなるものかを解明すべく，表情を取り巻く様々な外部のパラメータ（服装，髪型，社会的身分，友人）を含めた研究手法を開発していくことで，より多くの知見を得ることができるだろう。つぎに，この節の冒頭で紹介したとおり，状況要因が表情認知に及ぼす影響は欧米のデータでも限定的ながら報告されていること，また同時に，同じエスニシティの人々でも置かれている環境によって微妙な差異があることを

鑑みると，筆者らの研究結果は，東アジア文化圏と北米文化圏を単純な二分法で解釈されるべきではないと認識できたということである。こうした文化と表情認知についての新しい理解に基づいて，今後の研究では，東アジアあるいは北米で生きる人々が，どのような文脈で表情認知をすると文化差なく背景情報への関心を高め，あるいは背景情報を無視するのか，そしてどのような文脈になると，表情認知の文化差が強調されるのかということを体系的に理解することが必要である。実際，最近の研究で，伊藤ら（Ito, et al.2012; Ito & Masuda, 2012）は，表情認知の際，背景には人物のかわりに非常に目を引くような風景を用い，その風景をポジティブ（たとえば，美しい花畑の風景）あるいはネガティブ（たとえば，火事にあったビルの風景）なものにした実験刺激を用いると，カナダ人も日本人同様に，背景情報に注意を向けるようになることを明らかにしている。筆者は，このような研究を蓄積させることは，それぞれの文化において，人々が経験する日常生活の文脈のひとつひとつの場面で，行動パターンがいかに変化するのかを，一枚一枚の襞を丁寧にめくりながら理解していく厚い記述につながると思っている。

第５節：文化的産物（カルチュラル・プロダクツ）

シュウェーダーが文化心理学の役割をこころと文化の相互構築過程の理解にあると論じて以来（Shweder, 1991），それぞれの文化の意味体系が暗黙のうちに埋め込まれた文化（たとえば共有された意味体系，文化的慣習，思考体系，文化的規範，文化的制度）がその文化の構成員のこころ（たとえば知覚・認知・感情・動機）に及ぼす影響についての多くの実証研究が行われて来た。しかしながら，文化とこころの相互構築過程を，「文化⇔こころ」の双方向的関係と表すとすると，いままでの文化心理学の研究は，「文化→こころ」の研究に重点を置きすぎたあまり，それぞれの文化の構成員が自らの生れ落ちた場所で文化を作り上げる，「文化←こころ」の研究は十分に為されてこなかったと指摘することができる。この点について，モーリングとラムロー(Morling & Lamoureaux, 2008)は，それぞれの文化の構成員が作り出す事物を総称して「文化的産物（カルチュラル・プロダクト)」と呼び，数においてはまだ少ない「文化←こころ」の研究とも呼べるいくつかの実証研究をレビューしている（Imada, in press; Imada, & Yussen, 2012; Kim & Markus, 1999; Markus, et

al. 2006; Tsai, et al. 2006)。

モーリングとラムローの主張は，文化心理学の本来の役割に立ち返る上で，意義深いものである。そして，筆者の研究グループも，前節から紹介してきたような「包括的思考様式」と「分析的思考様式」の対比に当てはまる「文化的産物」を探り当て，「文化←こころ」の研究を，「文化→こころ」の研究と平行して進めることが，今後の文化心理学の発展のために極めて重要であると考えている（Masuda, et al.2012d)。

それでは，「包括的認知傾向」と「分析的認知傾向」が反映された文化的産物にはどのような特徴が想定できるであろうか？この疑問を解く鍵として，チェら（Choi, et al. 2003）は興味深い研究を発表している。この研究に参加した，韓国人とアメリカ人は，ある殺人事件がなぜ起こったのかを推理する上で手に入った 100 個近い項目から，不必要な項目をできるだけ取り除いて，重要な事項のみを選び出すという課題を行った。しかし，結果には大きな文化差があり，韓国人はアメリカ人に比べると，取り除いた項目が少ないということが報告されている。チェらは，この結果から，韓国人は，事件の推理に瑣末的と思われる項目でもとりあえずはキープしておこうと考えるのに対し，アメリカ人は，情報の核心に関わると思われる項目だけを積極的に選び出して，不必要と思われる項目を捨てることを厭わなかったのではないかという解釈を行っている。

この結果を「包括的認知傾向」と「分析的認知傾向」の特徴として鑑みると，北米文化圏の人たちは，情報を探索したり，情報を人に提示する際に，様々な情報のなかで，本質に関わると思われるものと，本質に関わらないものとを明確に区別する傾向があり，文化的産物を作りだす際にも，本質に関わると思われる情報のみに関心を向けるようなデザインになるのではないかと予想できる。それに対して，東アジア文化圏の人たちは，様々ある情報の関係性に目をむけ，すべての情報を包括的に，あるいは網羅的に概観できるような文化的産物を作り出すのではないかと予想できる。

この予想を確かめるために，筆者たち（Masuda, et al. 2008b）が最初に行った研究は，過去数世紀の欧米文化圏と東アジア文化圏の絵画表現の比較である。この研究では，重要な絵画を収蔵しているその国を代表する美術館—日本

の東京国立博物館および京都国立博物館，韓国のソウル中央博物館，台湾の故宮博物館，そしてアメリカ・ニューヨークにあるメトロポリタン・ミュージアム—の公式ウェブページにアクセスし，そこから入手可能な「傑作（マスターピース)」の電子画像のうち風景画・肖像画を分析した。

美術史学の知見によれば，１５世紀になると，イタリアの建築家フィリッポ・ブレネレスキが，風景画の描写法として２次元のキャンバス上に３次元的空間を描き出す遠近法技法を確立したといわれる。この技法は，キャンバスの先にある消失点に向かって３次元的な空間が広がっているという意味で，線遠近法とよばれることもある。この技法を用いると，個人の視点（画家の視点あるいは鑑賞者の視点）は一点に固定され，そこを中心として見ることのできる世界が描かれることになる。こうした線遠近法が発明されて以来，この技法は欧米文化圏の絵画にはなくてはならない絵画技法となった。また，多くの美術史家は，視点を一点に固定し，その視点から実際に見える世界を描くという線遠近法が確立した時期と，ルネサンス期から発展した，独立した個人が自らの視点で世界を捉えるという個人主義の思想が生まれた時期とが対応していると論じている（Berque, 1986; Giedion, 1964)。このように考えると，すべての物体を線遠近法という一つのルールに則って現実的に描くという技法には，先の章で述べた「分析的認知傾向」の特徴が反映されていると言えるだろう。

一方，東アジア文化圏の風景画の美術史を紐解くと，厳密な意味での個人の視点を一点に固定するという技法は，近世になって西洋絵画の影響を受けるまでは絵画技法には見られないことがわかる。一般的にいって，東アジア文化圏の風景画の特徴は，現実的ではなくても見るべき世界全体をくまなく捉えようとしている。そこでは見る者は，明確な個人である必然性はなく，むしろ移ろいゆく風景に身を任せるような視点を取ることが求められる。実際，東アジア文化圏の風景画では，長く続く巻物に風景や出来事の連なりを連綿と描く技法や，遠近法を用いず画面をフラットにすることにより，現実の可視性にとらわれずに多数の要素を一つの画面に組み込む技法，そして風景を鳥瞰的に描くことにより多くの情報を一つの画面に収める技法が確立されてきた（板坂, 1971)。このように考えると，東アジア文化圏の風景画の在りようには先の章で述べた「包括的認知傾向」が影響を及ぼしていると言えるだろう。

こうしてみると，「分析的認知傾向」の生かされた風景画法と「包括的認知傾向」の生かされた風景画法は，一方をとれば，他方をとれないようなトレードオフの関係があることがわかる。欧米の絵画で主流の技法である線遠近法では，２次元のキャンバス上に，奥行き感のある擬似的３次元の世界を作り出すことに成功した。しかし，このことは見る者の視点を一つに固定し，画面上の情報は消失点に向かって，観察者の近くに置かれたものは図の部分として大きく，目立つように描かれ，遠くのものは地の部分として小さく，かつ目立たなく描かれることを余儀なくされる。一方，「包括的認知傾向」の生かされた風景画法は，視点の制約がないために，図と地の区別をさほど気にせずに広範囲の情報を２次元に写し取れる点が有利であるが，消失点がないため，水平線・地平線を画面上方に設定し，近くのものは下のほうに，遠くのものは上の方に描くことになる。そのため，風景画は，多くの情報を積み重ねたような，奥行き感の薄いフラットな画像にならざるを得ない。

筆者らは，こうした技法の差異を比較するため，様々なパラメータの中から，単純な指標として水平線・地平線の位置に着目した。そして分析の結果、確かに東アジア文化圏の風景画での平均的な水平線・地平線の位置は，欧米文化圏の風景画におけるそれよりも統計的に有意に高く設定されていることを確認した。

東洋の絵画と西洋の絵画に反映された「分析的認知傾向」「包括的認知傾向」を調べるために着目した第二の点は肖像画の描き方である。ここにも先に述べたようなトレードオフの関係がある。筆者らは，肖像画の作者が「分析的認知傾向」の持ち主であれば，対象となるモデルをフレーム上に大きく描き，背景をぼかす，背景のトーンを落とすなどの技法によって，モデルが肖像画の図であり，背景はあくまで地であるというような，コントラストを際立たせるような技法を用いるのではないかと予想した。一方，肖像画の作者が「包括的認知傾向」の持ち主であれば，対象となるモデルをフレーム内で小さく描き，背景とのコントラストを落として，あたかもモデルがある状況にうめこまれたような手法を用いるのではないかと予想した。こうしたことを調べるため，筆者らは再び様々なパラメータの中から，比較を可能にする単純な指標として，モデルがフレームに占める比率に着目した。そして分析の結果、確かに欧米文化圏

の肖像画の平均的モデルのサイズは，東アジア文化圏のそれと比べ，フレーム全体に占める人物の比率が統計的にみて有意に大きいということを確認した。

さて，ここまで確認できたところで，一つの疑問が湧いてくる。それぞれの文化で高く評価されているマスターピース（傑作品）に見られる文化的伝統は，普通の人たちよりも，絵画や美術の分野で専門的な訓練を受けた画家に特に色濃く引き継がれていることは，疑いの余地もないが，このような傾向は，実際に普通の人たちが風景画を描いたり，ポートレート写真を撮る場合にも見られるのだろうか？

筆者らはこのことを調べるために，まず第一課題として，アメリカ人大学生とアメリカ在住の東アジア系留学生（中国人，韓国人，日本人）に風景画を5分間かけて描いてもらい，描かれた絵の中の物体の数と水平線の位置を分析した。そしてその結果，確かに東アジア系留学生の描いた風景画の水平線・地平線の位置はアメリカ人の描く風景画のそれよりも高いということを確認した。また，アメリカ人大学生の絵は，人・家・木・川・そして水平線・地平線といった指定されていた物体以外には，少数の物体を含めるだけにとどまったのに対し，東アジア系留学生の絵には，たとえば，人や木を沢山描いたり，魚を川に描いたりした絵など，多くの物体を含める傾向があることが明らかになった。さらに，学生たちには，第2課題として，実験室に招いたモデルをズームカメラを用いて撮影してもらい，そのポートレート写真の構図を分析した。この結果も予想通り，東アジア系留学生はおおむねズームを引き気味に撮るため，モデルのフレームに対する比率は小さくなり，その分背景の情報が多く入った構図になるのに対し，アメリカ人の学生はモデルの顔あるいは身体にズームを絞って撮るため，必然的にモデルのフレームに対する比率は大きくなり，背景情報がほとんど入らない構図になることが明らかになった。こうした結果は，最近行われたフェイスブックに用いられる写真のサイズを分析した研究においても追試されている。この研究では香港・シンガポール・台湾人の大学生は，フェイスブックで自分を表す写真に，背景情報を含めた画像を使う傾向があるのに対し，アメリカ人の学生は，背景情報を排し，自分の顔を大写しにして掲示する傾向があることが報告されている(Huang & Park, in press)。

さて，東アジア文化圏と欧米文化圏の人々の芸術表現あるいは個人のフェイ

スブックに掲載する写真の選好に明らかな差異が存在するのであれば，私たちが，日々の生活のなかで，様々な情報を伝達しあう場合の文化的産物（学会のプレゼンテーションや，インターネットのデザインなど）においても，それぞれの文化で主流の認知傾向の影響は見て取れるのではないだろうか？たとえば，人に何かを伝達するにあたって，どれくらいの量の情報を伝えるのが「ちょうどいい」かを考える際，それぞれの文化の担い手が身につけた「分析的認知傾向」と「包括的認知傾向」の違いがそうした判断に影響を及ぼすのだろうか？

このことを調べるため，ワンたち（Wang, et al. 2012）は，中国・韓国・日本・カナダ・アメリカの主要大学１００大学と主要政府機関のインターネットの顔とも言うべきフロントページに着目し，各ページに含まれる文字数，リンクの数，そしてページの長さを測る客観的指標としてスクロールバーの長さを分析した。そしてその結果，総じて東アジア文化圏の大学・政府機関のフロントページは，北米文化圏のそれに比べて，文字数やリンク数が多く，さらにはスクロールバーの長さが短いので，ページが比較的縦方向に長いフォーマットであることが多いことがわかった（ワンらは、毎年アメリカで開催されるパーソナリティと社会心理学会において、東アジア文化圏の研究者のポスターが、欧米文化圏のポスターに比べて、文字数が多いという結果も報告している）。

さてここまでわかってくると，文化的産物に含まれる情報量の違いは，人々の情報処理能力そのものに影響を及ぼしているのだろうかという疑問が生じる。たとえば，長い間複雑な情報に晒された人は，複雑な情報に対して耐性ができるのだろうか？この疑問に対してワンは，複雑なデザインの模擬ウェブページをつくり，ヨーロッパ系カナダ人と東アジア文化圏からの留学生を対象にして，そこから必要な情報をできるだけ早く探し出すという課題に従事してもらうという研究を行っている。そしてその結果，東アジア系カナダ人のほうがヨーロッパ系カナダ人よりも，必要な情報をより早く見つけ出すことができることを明らかにしている（図６参照）。この一連の結果は，カナダに来る前に、自らの文化の日常生活の中で複雑な環境情報に晒されてきた東アジア文化圏からの留学生は，そうした複雑な情報を効率良く処理するための認知のくせ（例えば多くの情報へ注意を配分できる能力）を発達させている可能性を示唆

するものである。実際にこうした情報処理能力は，決して生得的なものではなく，どのような情報量の環境に普段晒されているかが重要な要因となっていることは他の研究でも示されている。たとえば宮本ら（Miyamoto, et al.2006）は，アメリカ人に複雑な日本の風景の画像を長時間にわたり見せた後では，短期的ながら「日本人的」な認知傾向を示し，画像の背景情報にも目を向けることができるようになるという結果を報告している。以上の知見から，筆者は，今後のこのテーマの研究では，ある文化に特徴的な認知傾向が反映された文化的産物にどの程度の期間晒されていると特定の認知傾向が身につくのか，あるいはひとたび身についた認知傾向は，どれくらい強固に維持されるのかという問題を解いていく必要があると考える。

第 6 節：今後の展開—発達科学と神経科学から

本章ではこれまで，東アジア文化圏と欧米文化圏で育まれた文化特有の認知傾向の違いによって，それぞれの文化の構成員の行動パターンが異なるのみならず，彼らの作り出す様々な文化的産物（カルチュラル・プロダクツ）にも，その文化特有の認知傾向が反映されているということを見てきた。筆者は，文化心理学が今後さらなる発展を遂げるためには，こうした「文化⇔こころ」が相互構築されているダイナミズムを詳細に描き出すとともに，人間の生物学的な部分においてどの程度深くまで文化の影響が見いだされるのかを明らかにする必要があると考える。その意味では今後の学問的展開において，まず，前者の目的のためには発達科学との協力が，また，後者の目的のためには神経科学との協力は欠かせないと思う。本章の最後の節では，筆者のこうした問題意識が近年多くの文化心理学者に共有されており，実際に学際的な研究が始まっていることを紹介していく。

まず発達科学と協力して解くべき問題は，こうした認知傾向の文化差が，いったい何歳ぐらいから生まれるのかということである。この問いについては，すでに発達科学および文化心理学の双方から，いくつかの知見が発表されている。たとえば，発達心理学の古典的な研究では，アメリカ人の 10-11 歳の子供は，事物を分類する際に，それぞれの事物の共通の属性をベースに分類するような分析的認知傾向を示すのに対し，同じ年齢の中国人の子供は，それぞれの事物の関係性をベースに分類するような包括的認知傾向を示すことが報告さ

れている（Chiu, 1972）。同様に，中国人とアメリカ人の子供たちを対象とした文化心理学の研究においても，参加者にフィクションの短いお話を聞かせて，その話の中で出てきた出来事が将来どのようになるか予想してもらうと，7歳の段階では明確な文化差が見いだされないのに対し，9歳，11歳と年齢を重ねるにつれ，アメリカ人の子供は，出来事の普遍性を重視するような分析的な予想をするのに対し，中国人の子供は，何事にも変化は起こりうるという包括的な認知傾向を示すようになることが報告されている(Ji, 2008)。また，筆者らの研究グループも，日本とカナダの小学校1年生から6年生までの風景画の描写法を分析したところ，小学校4年生（9歳―10歳）以降は，子供たちは水平線・地平線の位置をほぼ100%理解し，そのような理解が出てきた段階では，すでに日本の子供の描く風景画の水平線・地平線の位置は，カナダ人の子供たちのそれよりも統計的に優位に高いことを確認している（Senzaki & Masuda, 2012）。

以上のような結果から，筆者らは，それぞれの文化に特徴的な認知傾向は子供たちが保護者とのコミュニケーションを通して，次第にその文化で当たり前と考えられる認知傾向を身につけていくと予想しているが，実際こうした予測が間違っていない可能性は高い。たとえば，ファーナルドと森川（Fernald & Morikawa, 1993）は，日本人とアメリカ人の母親に実験者の用意したおもちゃを使って自分の子供と遊んでもらい，その様子を録画し，日本人の母親とアメリカ人の母親が特定の対象（おもちゃ）について自分の子供にどのように話しかけるかについて分析したところ，アメリカ人の母親は，対象となるおもちゃの属性（たとえば「この車はタイヤがいくつあるかな？」「この車は何色かな？」）の数や車体の色）について子供に語りかける分析的認知傾向がみられたのに対し，日本人の母親の多くは，おもちゃを介して子供と一緒に遊ぶことによって（「たとえばブーブーを渡してちょうだいね」「こっちのブーブーと一緒にね」），注意の範囲を広げるような傾向見られると報告している。筆者ら（Masuda, et al. 2012b）も，現在8歳児を対象とした母子間のコミュニケーションから，増田らの課題（Masuda, et al. 2008）に参加した母親が子供に対して話しかける際に，周囲の子供たちの気持ちも考えるような「包括的認知傾向」を示すことを確認しており，今後の研究では，こうした保護者の側からの

インプットがどのような形で子供たちに定着していくのかについての研究の必要性を感じている。

文化心理学の今後の展開に欠かせない第二の問題は，生物としての人間のどのレベルにまで文化の影響が見られるのかという点である。そして，その問題を解くためには神経科学との協力が欠かせないであろう。近年の学際的研究の成果をまとめると，人間の脳は思いのほか可塑性があり，その人物の経験やスキルをマスターした度合いが，脳の形質・機能の両面におよぼす影響は大きいということが指摘されている（Maguire, et al. 2000; Scholz, et al. 2009)。こうした結果を参考にしつつ，現在，文化心理学の領域でも文化的経験が脳の活動パターンに及ぼす影響についての研究が進みつつある（Uskul ＆Kitayam, 2011)。たとえば行動データと fMRI(機能的磁気共鳴画像法)データを組み合わせた研究では，東アジア文化圏の人々と欧米文化圏の人々に注意に関わる課題をやってもらい，そこに見いだされる脳の活動パターンの類似性および差異を検討している（Goh, et al., 2007; Gutchesses, et al. 2006; Hedden, et al. 2008)。たとえば，ヘデンら（Hedden, et al. 2008）は，課題が不慣れな場合にはその課題の遂行に多くの認知負荷がかかるため，脳内の活性部位の範囲も大きくなると想定してヨーロッパ系アメリカ人と中国系アメリカ人の脳で活性化している範囲を測定する研究を行った結果，中国系アメリカ人は，「分析的認知」が必要とされる課題ではヨーロッパ系アメリカ人よりも脳内の活性部位が大きいのに対して，「包括的認知」が必要とされる課題では，ヨーロッパ系アメリカ人よりも脳内の活性部位が少なかったと報告している。この結果は，同じアメリカ人でも，日常生活において、何が重視されているかには、中国系のコミュニティとヨーロッパ系のコミュニティの間で違いがあることを示唆している。

また，行動データと ERP(事象関連電位)を組み合わせた研究でも，脳波のパターンに文化差があることが報告されている（Ishii, et al. 2010; Lewis, et al. 2008; Goto, et al. 2010; Na & Kitayama, 2011)。たとえば，ゴトウらは，背景情報と中心情報が，予想外の組合わせであったり，一貫性がなかった場合は，東アジア文化圏の人々は欧米文化圏の人々に比べて，N 400 の値が大きくなることを予想し，実際にそのような結果を得ている。これについてゴトウらは，

東アジア文化圏の人々が，中心情報を考える際にも，背景情報に注意を向けているためであると論じているが，この点は，筆者らが先の節で報告した文化と注意研究の結果と符合している（Goto,et al.2010）。

以上，本節では，文化心理学の今後の展開に関わる発達科学と神経科学の現在進行形の研究を紹介することにより，社会心理学をベースに発展してきた文化心理学が，これから社会心理学の枠を超えて，学際的な研究分野となっていく必要性を論じた。もちろん，学際的研究を進めるためには，他分野との協力関係のみならず，研究者には新しい知識を柔軟に取り入れ，身につけていくことが要請されており骨の折れることであろう。しかしながら，文化とこころの複雑な関係を明らかにしていくためには，自らの専門分野にとどまることで細かい研究領域を分析的に突き詰めるよりは，広範囲の研究領域間の研究法や理論の差異を超えて包括的に研究を進めていくことが大切であると筆者は考える。その意味では今後文化心理学研究が発展していく場は，包括的認知傾向を身につけた研究者にとっては，いささかなりとも有利な研究環境といえるかもしれない。

引用文献

Berque, A.(1986). *Le sauvage et l' artifice: Les Japonais devant la nature*. Paris, Gallimard.

Bruner, J. S.(1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Bruner, J. S., & Goodman, C. C.(1947). Value and need as organizing factors in perception.*Journal of Abnormal Social Psychology,42,* 22-44.

Carroll, J. M., & Russell, J. A.(1996). Do facial expressions signal specific emotions? Judging emotion from the face in context. *Journal of Personality and Social Psychology, 70,* 205-218.

Chiu, L.-H.(1972). A cross-cultural comparison of cognitive styles in Chinese and American children. *International Journal of Psychology,8,*235-242.

Choi, I., Dalal, R., Kim-Prieto, C., & Park, H.(2003). Culture and judgment of causal relevance. *Journal of Personality and Social Psychology,84,*46-59.

Choi, I., Nisbett, R. E., & Norenzayan, A.(1999). Causal attribution across cultures: Variation and universality. *Psychological Bulletin,125,*47-63.

Chua, F., Boland, J., & Nisbett, R. E.(2005). Cultural variation in eye movements during scene perception. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America, 102,*12629-12633.

Darwin, C.(1965). *The expression of the emotions in man and animals*. Chicago: University of Chicago Press.(Original work published 1872)(チャールズ・ダーウィン『人間及び動物の表情』, 村上哲夫訳, 1950)

Duffy, S., Toriyama, R., Itakura, S., & Kitayama, S.(2009). The development of culturally-contingent attention strategies in young children in the U.S.and Japan. *Journal of Experimental Child Psychology,102,*351-359.

Ekman, P.(1971). Universal and cultural differences in facial expressions of emotions. In J. K. Cole(Ed.), *Nebraska symposium on motivation(*pp.207-283). Lincoln: University of Nebraska Press.

Ekman, P., & Friesen, W. V.(1971). Constants across cultures in the face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology, 17,*124-129.

Ekman, P., Friesen, W. V., & Ellsworth, P.(1972). *Emotion in the human face: Guidelines for research and a review of the findings*. Elmsford, NY: Pergamon Press.

Fazio, R. H.(2001). On the automatic activation of associated evaluations: An overview. *Cognition & Emotion,15*,115-141.

Giedion, S.(1964). *Space, time and architecture, the growth of a new tradition(*4th ed.). Cambridge, MA: Harvard University Press.

Goh, J.O., Chee, M.W., Tan, J.C., Venkatraman, V., Hebrank, A., Leshikar, Jenkins, L., Sutton, B.P., Gutchess, A.H. & Park, D.C.(2007). Age and culture modulate object processing and object-scene binding in the ventral visual area. *Cognitive, Affective & Behavioral Neueroscience,7*,44-52.

Goto, S.G., Ando, Y., Huang, C., Yee, A., & Lewis, R.S.(2010). Cultural differences in the visual processing of meaning: Detecting incongruities between background and foreground objects using the N400. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*,*5*,242-253.

Gutchess, A.H., Welsh, R.C., Boduroglu, A. & Park, D.C.(2006). Cultural differences in neuralfunction associated with object processing. *Cognitive, Affective & Behavioral Neuroscience,6,* 102-109.

Hedden, T., Ketay, S., Aron, A., Markus, H.R. & Gabrieli, J.D.E.(2008). Culturalinfluences on neural substrates of attentional control. *Psychological Science*,*19*,12-17.

Imada, T.(in press). Cultural narratives of individualism and collectivism: A content analysis of textbook stories in the United States and Japan. *Journal of Cross-Cultural Psychology.*

Imada, T., & Yussen, S. R.(2012). Reproduction of cultural values: A cross-cultural examination of stories people create and transmit. *Personality and Social Psychology Bulletin*,*38*,114-128.

Ishii, K., Kobayashi, Y., & Kitayama, S.(2010). Interdependence modulates the brain response to word-voice incongruity. *Social Cognitive and Affective Neuroscience,5,*307-317.

板坂元(1971). 日本人の論理構造. 東京：講談社.

Ito, K., & Masuda, T.(2012). *Agency and Facial Emotion Judgment in Context.* Manuscript submitted for publication, University of Alberta.

Ito, K., Masuda, T., & Hioki, K.(2012). Affective Information in Context and Judgment of Facial Expression: Cultural Similarities and Variations in Context Effects Between North Americans and East Asians. *Journal of Cross-Cultural Psychology,43,*429-445.

Izard, C. E.(1971). *The face of emotion.* New York: Appleton-Century-Crofts.

Izard, C. E.(1994). Innate and universal facial expressions: Evidence from development and cross-cultural research. *Psychological Bulletin,115,*288-299.

Ji. L.(2008). The leopard cannot change his spots, or can he? Culture and the development of lay theories of change. *Personality and Social Psychology Bulletin,34,*613-622.

Ji, L., Nisbett, R. E., & Su, Y.(2001). Culture, change and prediction. *Psychological Science*, 12, 450-456.

Ji, L. J., Peng, K., & Nisbett, R. E.(2000). Culture, control, and perception of relationships in the environment. *Journal of Personality and Social Psychology,78,*943-955.

Jones, E. E.(1979). The rocky road from acts to dispositions. *American Psychologist,34,*107-117.

Gilbert, D. T; Malone, P. S.(1995). The correspondence bias. *Psychological Bulletin,117,*21-38.

Huang, C.-M., & Park, D.(in press). Cultural influences on facebook photographs. *International Journal of Psychology.*

Heine, S. J.(2012). *Cultural psychology, 2nd edition.* New York: W.W. Norton.

Kim, H. S., & Markus, H. R.(1999). Deviance or uniqueness, harmony or conformity? A cultural analysis. *Journal of Personality and Social Psychology,77,*785-800.

Kitayama, S., Duffy, S., Kawamura, T., & Larsen, J. T.(2003). Perceiving an object and its context in different cultures: A cultural look at New Look. *Psychological Science,14,*201-206.

Kitayama, S., & Cohen, D.(Eds.).(2007). *Handbook of cultural psychology.* New York: Guildford Press.

Kluckhohn, C.(1944). *Mirror for Man*, New York: Fawcett.

Lewis, R.S., Goto, S.G., & Kong, L.(2008). Culture and Context: East Asian American and European American Differences in P3 Event-Related Potentials. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *34,*623-634.

Markus, H., & Kitayama, S.(1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review,98, 224-253.

Markus, H. R., & Kitayama, S.(2010). Cultures and selves: A cycle of mutual constitution. *Perspectives on Psychological Science,5,* 420-430.

Markus, H. R., Uchida, Y., Omoregie, H., Townsend, S. S. M., & Kitayama, S.(2006). Going for the gold: Models of agency in Japanese and American contexts. *Psychological Science,17,*103-112.

増田貴彦(2010). ボスだけを見る欧米人,みんなの顔まで見る日本人　東京：講談社

増田貴彦・マーク H. B. ラドフォード・明瀬美賀子・ホゥイタンワン(2008). 状況要因が眼球運動パターンに及ぼす影響：日本人と西洋人の周辺情報への敏感さの比較研究. *心理学研究,79,*35-43.

増田貴彦・山岸俊男(2010). 文化心理学：心がつくる文化, 文化がつくる心 上巻・下巻　東京：培風館

Masuda, T., Argo, J., Ito, K., Hioki, K.(2012a). *How do MBA students judge a boss's facial expressions? Cultural variation in judgment styles between Canadians vs. Japanese.* Presentation at the 13th annual meeting of the Society of Personality and SocialPsychology, Jan 26-28, San Diego.

Masuda, T., Ellsworth, P. C., Mesquita, B., Leu, J., Tanida, S., & van de Veerdonk, E.(2008a). Placing the face in context: Cultural differences in the perception of facial emotion. *Journal of Personality and Social Psychology,94,*365-381.

Masuda, T., Gonzalez, R., Kwan, L., & Nisbett, R. E.(2008b). Culture and aesthetic preference: Comparing the attention to context of East Asians and Americans. *Personality and Social Psychology Bulletin,34,*1236-1248.

Masuda, T., & Nisbett, R. E.(2001). Attending holistically vs. analytically: Comparing the context sensitivity of Japanese and Americans. *Journal of Personality and Social Psychology,81,*922-934.

Masuda, T., & Nisbett, R. E.(2006). Culture and change blindness. *Cognitive Science,30,*381-399.

Masuda, T., Shimizu, Y., Nand, K., Uchida, Y., & Takada, A.(2012b). *Culture and face recognition: Comparing the context sensitivity of Japanese and Canadian school age children.* Unpublished Manuscript, University of Alberta.

Masuda, T., Wang, H., Ishii, K., Ito, K.(2012c). Do Surrounding Figures' Emotions Affect Judgment of the Target Figure's Emotion? Comparing the Eye-Movement Patterns of European Canadians, Asian Canadians, Asian International Students, and Japanese. *Frontier in Integrative Neuroscience, 6:72.* doi: 10.3389/fnint.2012.00072.

Masuda, T., Wang, H., Ito, K., & Senzaki, S.(2012d). Culture and cognition: Implications for art, design, and advertisement. In S. Okazaki(Ed.), *Handbook of Research in International Advertising*(pp.109-132). Edward Elgar Publishing, UK.

Maguire, E. A., Gadian, D. G., Johnsrude, I. S., Good, C. D., Ashburner, J., Frackowiak, R. S., & Frith, C. D.(2000). Navigation-related structural change in the hippocampi of taxi drivers. *Proceedings of the National Academy of Science of the United States of America, 97*,4398-4403.

Miyamoto, Y., Nisbett, R. E., & Masuda, T.(2006). Culture and the physical environment: Holistic versus analytic perceptual affordances. *Psychological Science, 17,*113-119.

Morling, B., & Lamoureaux, M.(2008). Measuring culture outside the head: A meta-analysis of individualism-collectivism in cultural products. *Personality and Social Psychology Review, 12,* 199-221.

Morris, M. & Peng, K.(1994). Culture and cause: American and Chinese attributions for social and physical events. *Journal of Personality and Social Psychology, 67,*949-971.

Nisbett, R. E.(2003). *The geography of thought*. New York, NY: Free Press.

Nisbett, R. E., & Masuda, T.(2003). Culture and point of view. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America,100,*11163-11175.

Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A.(2001). Culture and systems of thought: Holistic vs. analytic cognition. *Psychological Review,108*,291-310.

Norenzayan, A. Choi, I., & Nisbett, R. E.(2002). Cultural similarities and differences in social influence: Evidence from behavioural predictions and lay theories of behaviour. *Personality and Social Psychology Bulletin,28,*109-120.

Norenzayan, A., Choi, I., & Peng, K.(2007). Cognition and perception. In S. Kitayama & D. Cohen(Eds.), *Handbook of Cultural Psychology*(pp. 569-594). New York: Guilford Publications

Norenzayan, A., Smith, E. E., Kim, B. J., & Nisbett, R. E.(2002). Cultural preferences for formal versus intuitive reasoning. *Cognitive Science,26,*653-684.

Peng, K. & Nisbett, R.(1999). Culture, dialectics, and reasoning about contradiction. *American Psychologist, 54,* 741-754.

Ross, L.(1977). The intuitive psychologist and his shortcoming. In L. Berkowitz(Ed.), Advances *in experimental social psychology*(Vol. 10,pp.173-220). New York, NY: Academic Press.

Russell, J. A.(1991). The contempt expression and the relativity thesis. *Motivation and Emotion,15*,149-168.

Russell, J. A., & Fehr, B.(1987). Relativity in the perception of emotion in facial expressions. *Journal of Experimental Psychology: General,116*,223-237.

Scholz, J., Klein, M. C., Behrens, T. E. J., & Johansen-Berg, H.(2009). Training induces changes in white-matter architecture. *Nature Neuroscience,12,*1370-1371.

Senzaki, S., & Masuda, T.(2012). *Holistic vs. Analytic Expressions in Children' s Artworks:Investigating Cross-Cultural Differences and Similarities in Drawings and Collages between Canadian and Japanese School-Age Children.* Manuscript submitted for publication.

Senzaki, S., Masuda, T., & Ishii, K.(2012) *When Does Culture Influence Attention? Examining Patterns of Eye Movement in European Canadians and Japanese.* Manuscript submitted for publication, University of Alberta.

Sherif, M.(1936). *The psychology of social norms.* New York: Harper.

Shweder, R. A.(1991). Cultural psychology: What is it? In R. Shweder(Ed.), *Thinking through culture(*pp. 73-110). Cambridge, MA: Harvard University Press.

Tsai, J. L., Knutson, B., & Fung, H. H.(2006). Cultural variation in affect valuation. *Journal of Personality and Social Psychology, 90,*288-307.

Wang, H., Masuda, T., Ito, K., & Rashid, M.(in press).How much information? East Asian and North American cultural products and information search performance. *Personality and Social Psychology Bulletin.*

Uskul, A. K., & Kitayama, S.(2011). Culture, mind, and the brain: Current evidence and future. *Annual Review of Psychology,62,* 419-449.

Wundt, W. (1916). *Elements of folk psychology*. London: Allen and Unwin.

図１　文化とこころの相互構築過程

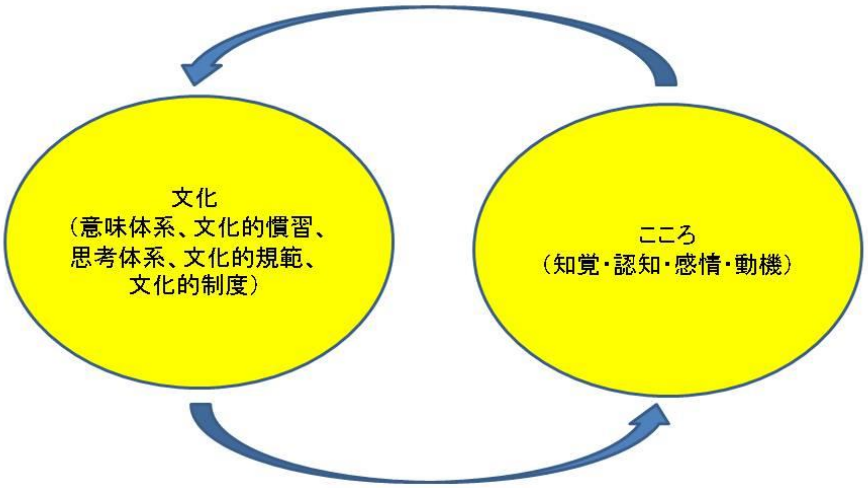

図２　Masuda & Nisbett (2001)で用いられた実験刺激

図３　Masuda & Nisbett (2001)の再認実験の結果

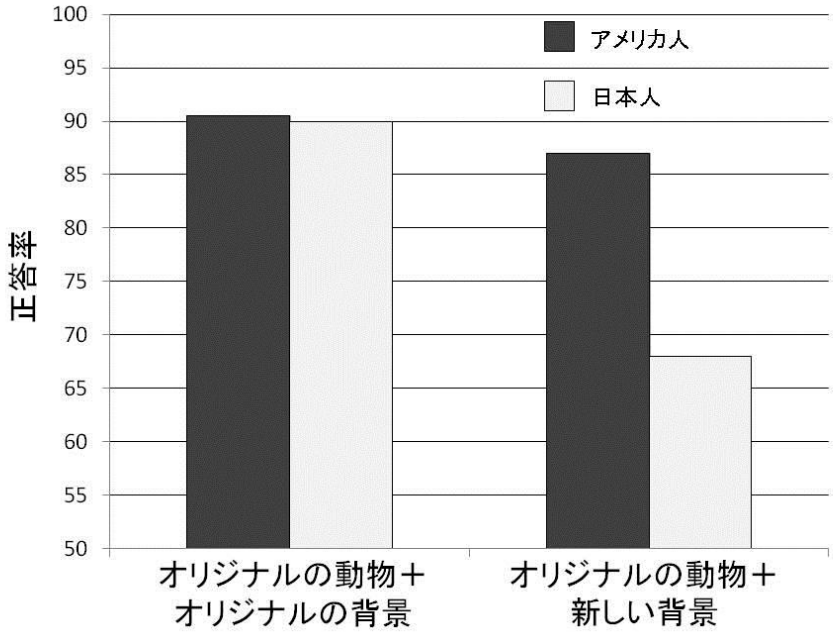

図４　Masuda & Nisbett (2012c)で用いられた実験刺激

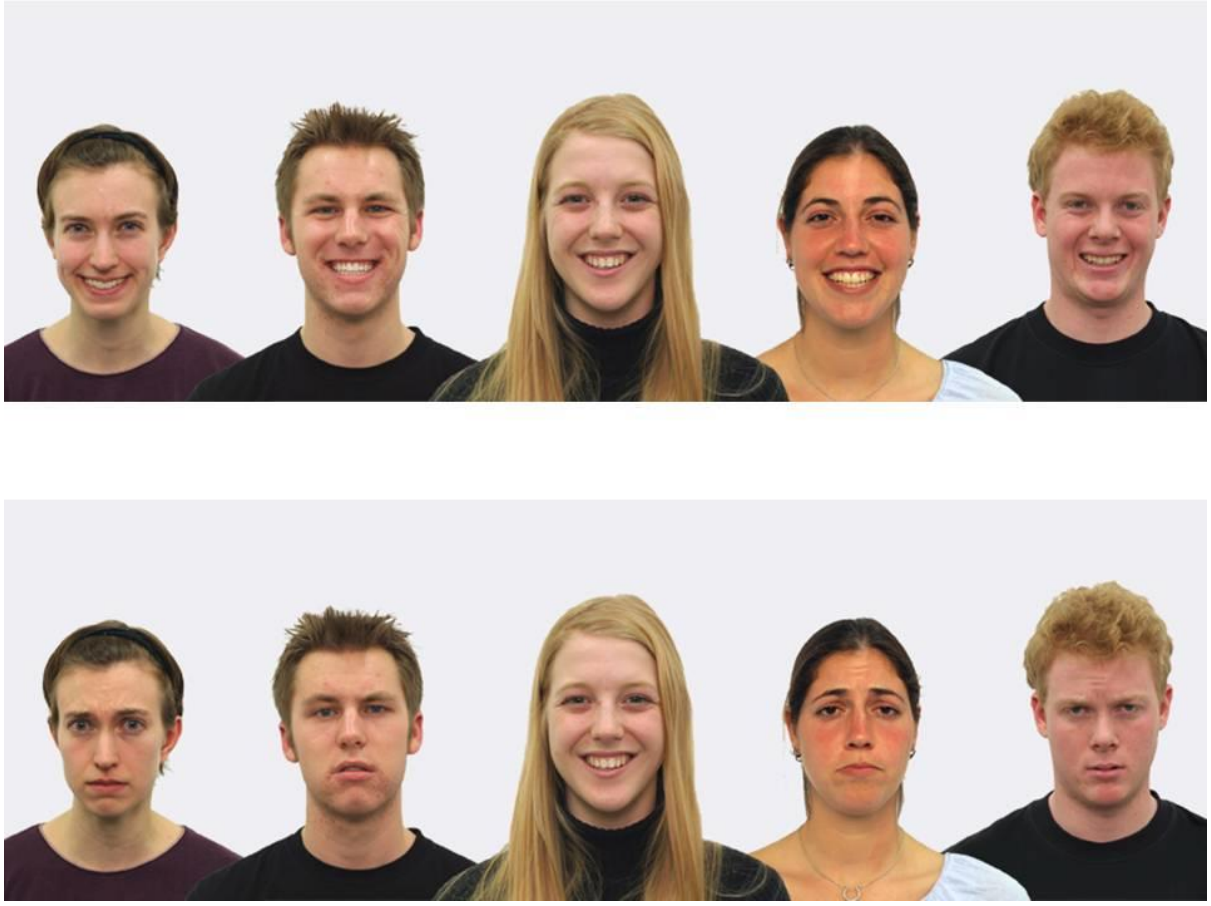

図５　Masuda & Nisbett (2012c)の結果。ターゲットと背景の表情が一致している場合と一致していない場合の同一ターゲットの表情判断のずれを各グループごとに表した図。

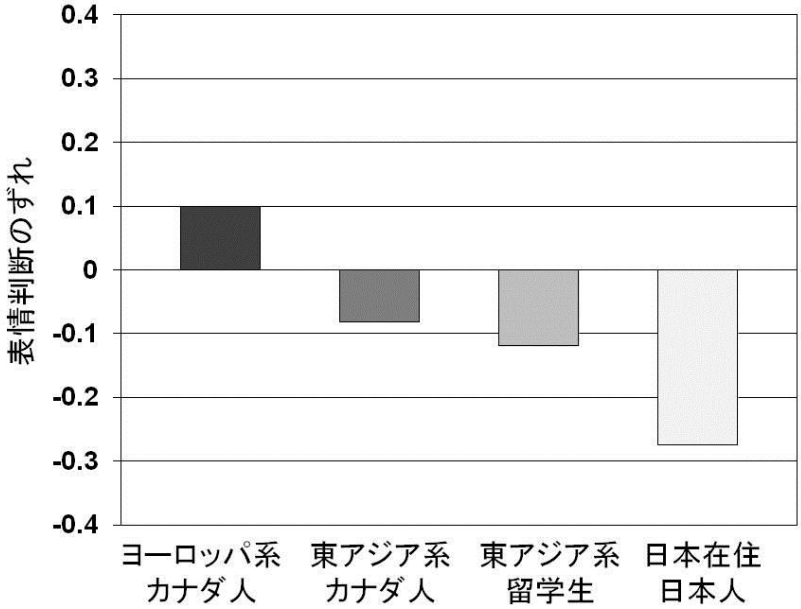
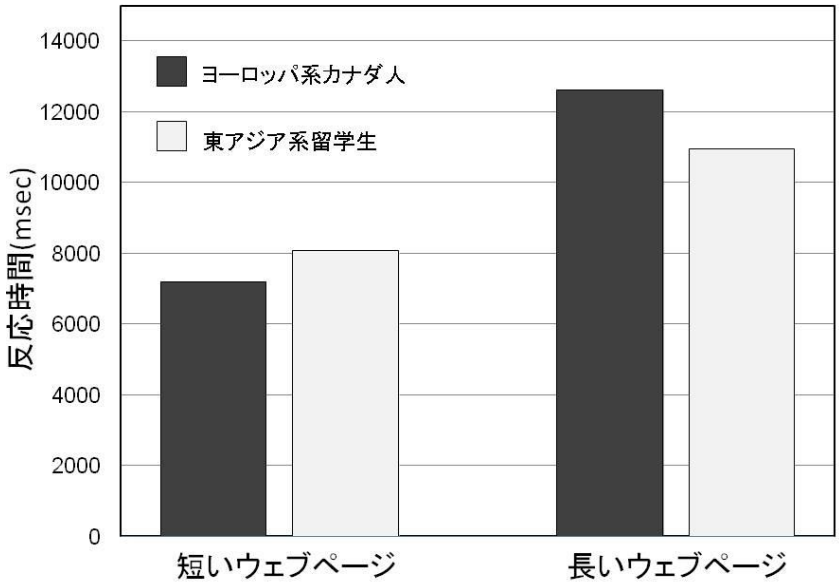
図６　Wang et al. (in press)の結果。短いウェブページ上での情報探索には文化差がないが，長いウェブページの場合は，東アジア系留学生の方がヨーロッパ系カナダ人よりも情報探索が速かった。